

報告・学術講演

- 1) 江原昭善・木下 実(1981): 大曲輪遺跡出土人骨の概略。大曲輪遺跡発掘調査概要報告書。名古屋市教育委員会
- 2) 江原昭善(1981): 類人猿と人類 — その関係をめぐって。京大ヴィールス研究所主催学術講演会
- 3) Ehara A.(1981): Meaning of the study of the human evolution. Special lecture at the Central Laboratory and Research Institute, Addis Ababa.
- 4) Ehara A., Shibata H., Yamagaki T., and Assefa M.(1981): Preliminary report on the stratigraphical, palaeo-primatological and prehistorical research along the Awash, 1980.
- 5) Setoguchi, T., et al.: The upper dentition of *stirtonia* (ceboidea, primates) from the miocene of Colombia, South America and the origin of the postero-internal cusp of upper molars of howler monkeys (*alouatta*). Kyoto University Overseas Research Reports of New World Monkeys. 11, pp.51-60. (1981)

幸島野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・
森 明雄

本施設の建物については設立以来、職員ならびに共同利用研究者共に不自由をしのいできた。昭和55年度の施設整備費で、4部屋の増築が行われ、こうした障害を解決することができた。昭和56年3月末日完成、同4月16日に、市及び幸島のある市木地区の関係者を招いて、ささやかな竣工式を行った。

幸島野猿についての経常的観察を含め、施設の運営は例年どおり順調に行われているが、幸島地域をめぐる観光開発や観光客増加の趨勢と関連して、研究・社会教育・観光の3点の調和を図っていくことに、今後なお充分留意していく必要に迫られている。

幸島群の population は昭和56年4月1日現在

で主群59頭、分裂した“マキ”グループ16頭、ソリタリー13頭の合計88頭である。年令構成ならびに近年の出産率・流死産率などをみると減少の一途をたどる可能性もあるので、くわしい検討を進めている。

群れの状況は概略、次のとおりである。

55年に、リーダーの交替を含む社会変動が生じた。55年4月、この群れのオトナのオスとしては第1位のナベ、第2位のクモ、第3位のイカの3頭が中心にいた。セミソリターのゲシが群れに入ってきた。4月22日に、第2位のクモとゲシの順位が逆転し、ナベ>ゲシ>クモ>イカの順位となった。この順位が以後続いていたが、6月23日、リーダーのナベが消失した。従ってゲシ>クモ>イカの順位となった。7月4日、7月8日、イカが2日間にわたってひどい傷を受け、陸へ連れて帰った後死亡した。さらに9月7日には第3位のオスのクモが島を抜け出た。第1位になったゲシには、群れの個体がついて歩く、また、取締り行動をするといった様子が、最初から見られた。しかしそれでも、最初の一ヶ月間は、職員が餌を持って島へ行くと、群れの個体が無秩序に餌に集中してくるという現象が見られた。こうしたことは、リーダーオスに遠慮して通常は生じないことである。現在群れのオトナオスは、ゲシ>ケバ>ノソの3頭が群れの中心にいる。なお並行して、14才メスのマキほかが主群を離れて行動し、分裂群が成立している。

55年度に本施設を利用した共同利用研究員は、宮藤浩子(京大)と早木仁成(京大)の両名であり、このほかに岩本俊孝(宮崎大)、薄井萬平ほかの研究者による調査研究が行われ、55年度に本施設を利用した外来研究者は日数にして延べ341日である。なお、施設常駐の森 明雄助手は、昭和54年8月以来、西アフリカへ研究調査のため出張していたが、55年8月に帰国した。

研究概要

1) 幸島のサル生態学的・社会学的研究

森 明雄・三戸サツエ

冠地富士男・山口直嗣

前年度からの継続で、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集、また毎月1回はほぼ全個体の体重測定を行っている。社会学的研究については、個々のトピックスについて調査を進めている。

2) 内部寄生虫に関する研究

堀井洋一郎・薄井萬平(宮崎大)

森 明雄

内部寄生虫卵の変化を定期的に調査した。

3) 類人猿の社会学的生態学的研究

森 明 雄

報告・その他

1) 三戸サツエ(1980): ポスザルへの道,

pp. 166. ポプラ社, 東京。

サル類保健飼育管理施設

竹中 修(兼)

千葉敏郎・松林清明

後藤俊二・松林伸子¹⁾

前二年度の年報(vol. 8, 9)で報じたように昭和54年度概算要求において認められた繁殖コロニーが昭和55年6月に竣工した。これは総面積2,437㎡の繁殖母群放飼場と528㎡の育成舎よりなっており、前者を4区画に分けて総数約120頭のアカゲザル・ニホンザルを放飼し、年間約60頭の研究用子ザルの育成を目的としている。放飼場完成にともない繁殖母群の獲得に努めたが、成熟した健康なサルを多数同時に購入することは年を追って難しくなっており、とくにアカゲザルの母群構成は困難をきわめた。最終的には既存の第2放飼実験場で飼育していたインド産アカゲザル、グループゲージで分散飼育していた中国産アカゲザル、新たに購入出来た中国産アカゲザルおよび京都市嵐山の岩田山自然遊園から導入したニホンザルの計4群をもって母群とした。アカゲザルの繁殖母群は総数ではオトナオス7頭、オトナメス43頭、子ザル22頭で構成されたことになる。またニホンザルはオトナオス2頭、オトナメス11頭、子ザル10頭である。したがって当初の母群120頭、年間60頭の研究用子ザルの育成のレベルに達するにはここ数年母群の充足に努めねばならないと考えている。なお母群構成半年目の昭和56年初夏にはアカゲザル32頭(出生後事故死をした5頭を含む)およびニホンザル4頭の出

産をみている。なお近年放飼群を対象とした種々の共同利用研究、所内研究が増えているが繁殖コロニー完成により、既存の放飼実験場が本来の機能をも果し得る余裕が生じたのは喜ばしい事である。

繁殖コロニー新設にともない技官定員1名の増加と施設運営費の増加が認められた。これらについては全国の国立大学動物実験施設から強い要求が出されていることでもあるが、要求が実現され今後数年間の施設運営に見通しが得られた。関係当局の理解と援助に対し感謝の意を表したい。

人事においては、技官定員が1名増加したことにより、石松正衣が8月1日付で採用され育成舎担当となった。また研究所附属施設長候補者選挙内規が改正(全所員による推挙制度の導入および4期以上の重任の禁止が主たる点)され、新内規のもとに施設長候補者の選挙がおこなわれ、竹中 修(生化学部門)が昭和55年4月1日より2年間施設長を兼任することになった。

昭和55年度サル施設経費概算

項 目	金 額 (千円)
備 品 費	1,857
サ ル 購 入 費	1,415
サル飼料購入費	9,465
薬 品 代	1,304
消 耗 品 費	2,488
人 件 費	7,260
補修・改造等工事費	2,129
ゲージ購入費	1,755
雑 費	292
計	27,965

繁殖コロニー初年度整備費

項 目	金 額 (千円)
ゲージ購入費	3,618
工 事 費	3,317
計	6,935

1) 教務職員